

大学と地域をつなげる 図書館カフェ

東京学芸大学
藤井健志

藤井健志とは・・・（その1）

そもそも宗教学を専門とする。

（日本近代宗教史・海外布教史）

大学では最初は道德教育講座、それから
紆余曲折があり、現在は「多文化共生教育
コース」で教える。

藤井健志とは・・・（その2）

2012年に図書館長＋副学長に。

いろいろありましたが、2010年より、
学長補佐をやっていて、その果てに。

ちなみに今は普通の教員に戻っています。

本日のお話は、私の図書館長時代の4年間の話です（私のお話ではなくて、図書館の話）。

2012年度～2015年度に図書館長

なおかつ、

2014年～2015年に図書館改修
（これも予想していなかった）

図書館の話の前に、
そもそも東京学芸大学とは？

東京の師範学校を母体とした、教育系の
大学です。

今、流行の「創基」で言うと、1873年設立
(2023年に創基150周年)

現在の東京学芸大学

- 学生数：5000人余り
(学校教育系と教育支援系に分かれる)
- 教員数：300人余り
- 修士課程＋博士課程あり

特徴は教員養成系大学独特の細分化された構造

→全学の課程・専攻・選修は38

全学の教員組織は、16講座50分野

多様性があるとも言えるが、まとまりがないとも言える。

ただ、まとまりがないのは、単に研究分野が多様なだけではなく…、

もしかしたら、「学校教員」という人たち（その予備軍を含む）は、視野があまり広くないのかもしれないと、疑っています。

学校という狭い世界で完結する人生だから。

（ちなみに学生は教員の子が多く、生真面目なものが多い→でも関心の範囲が狭い）

これは、あくまでも関心のもち方の話で、
自分の関心のある分野では、結構積極的です。



地域の子どもたちを集めて勉強会を開いたり、
一緒に遊ぶサークルもある。

でも数はそれほど多くない。

東京学芸大学の特徴としては、次の2点があ
げられるように思います。

- ・ 多様性がある。
- ・ しかし閉鎖的でもある。

(これは教員養成系大学の特徴???)

さてここで…

もう一度私の話。

藤井健志とは（その3）

2012年～2015年、広報担当の副学長でもあった。

（カフェの話では、これがけっこう重要）

多摩地域（小金井は東京の多摩地域です）の、地域誌を作っているT信用金庫から、小金井市特集をやるので、参加しないかと声をかけられる。

大学は地域連携は、形式的にはしていたが。

- ・ 教育委員会との会合
- ・ 市長とのたまの交流 等々

おもしろそうだからと言うより、
広報担当という立場上、行かねばと思い、
行きました。

そこでちょっとした体験をしました。

学芸大学は存在感がないと言われる。

学芸大学は地域との交流をきちんとやってこなかったもので、地域の人から見ると、こう見えるのだと、つくづく思いました。

ここら辺が、カフェの出発点になります。

それからここで後にカフェの運営を委託する
K氏と知り合ったことも、具体的なきっかけ
となりました。

さてここで、
少し附属図書館の話。

この図書館

- 1974年建設(2014年時点で、築40年)
- 地上3階、地下1階（各階約1,600m²）
- 閲覧席580席
- 収容数約50万冊（地下に書庫あり）
- グループ学習室等あり
- AVホールという余計なものもあった
- 学生が片隅で食事をするのを黙認

2014年度に改修する予算が付く！

図書館は、もう大騒ぎでした。

（嬉しくもあり、大変でもあり）

ただし改築ではなくて、改修

（建て替えではない）

骨組みは、前のものを使う。

床面積も増やしてはならない！

文科省のもう一つの注文は、
ラーニングコモンズを
作ること

図書館は研究するところではなく、
学ぶところである！？

そこでまあ、いろいろ工夫をしながら、
改修の設計が始まりました。
(他大学の図書館を見学したり)

その過程で、
カフェの発想が生まれました。

図書館にカフェを置くのはどうだろうか？

- 一つにはカフェを併設している私立大学の図書館がいくつかあった。
- 図書館内の学生の飲食も問題であり（場所は指定されていたけれど）、
- もう一つ、学芸大学の図書館のある特徴がきっかけとなりました。

学芸大学の図書館の特徴

学外者にも本の貸し出しをしている。

（数は必ずしも多くないが）

年間の登録者：6～700人

年間の貸し出し冊数：6～7000冊

本来は一般市民というよりも、現職教員を想定したもの。

ともかくそうした伝統があったので…

- ・ 図書館をもっとオープンにして、学外者にもっと入ってきてもらえないか、と考える。
- ・ 存在感がないと言われて、ショックを受けたこともあって、地域との連携も考える。
（小金井市図書館分館構想も勝手にした）
- ・ でも学外者に入ってもらうにはどうしたらだろうか。

あまり考えていませんでしたが、
学外者にとって、
大学のキャンパスというのは、
たいへん入りにくい場所のようだ
と気が付きました。

ちょうどその時、
T信用金庫の集まりで出会ったK氏から
会いたいという話がありました。

ただし地方創生の話だったのですが。

(産学＋官民の地方創生)

でも彼は別のところでカフェも開いていた。

K氏は、いくつかの小規模な事業をしながら、地域の起業家を育てたり、地域の活性化の問題に取り組んでいました。

カフェも単なるカフェというよりも、地域における人の交流をどう活性化するかに関わったの実験的なものでした。

(当時は終了していた)

話をしているうちに、図書館にカフェを作っ
て、そこを大学と地域との交流の拠点にした
らどうだろうかということになりました。

こうした流れから、私の中で改修する図書館
にカフェを作るのだ、という意識が芽生えま
す。

ここでもう一つ大事なポイント

当時の大学は…
金に困っていた。

国は国立大学を支えてくれない。
(特に教員養成系大学は…)

ならばいろいろな外部資金に頼らねば。

その中で、地域のいろいろな
人や資産も重要なのでは。

(大学が単独で生き延びられる時代ではない)

図書館は、なんととっても大学を象徴する場。

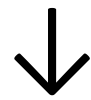


地域交流の拠点として、結構よいのでは。



地域の人を呼び込む装置として、

カフェはよいのではないか。



図書館にカフェを作ったら？

諸事情はありましたが、
カフェは、
大学と地域を結びつける拠点という発想から
生まれました。

むしろそれが先行して、
カフェ構想が作られました。

構想の中でも、
現実的な動きでも、
カフェが「図書館の中にあること」は、
実はうまく機能していません。
(と、取り敢えずは思います)

その一つの理由は、

図書館員の大反対

1年前の段階でも「自動販売機コーナー」
だった。

図書館員の反対も
わからないわけではありません。

- 飲食のスペースが閲覧や収容スペースを圧迫するとは・・・
- そもそも大学図書館の本は誰のもの？
- 私たちはカフェなんか管理できない。

- スペースの問題は、AVホールをなくすことで、何とか解決。
- カフェの管理には図書館は一切かかわらず、広報課の管轄とすることで一応落着。
- ただし大学図書館の本は誰のもの、ということはいまだに解決していません。
(学外者が借りられるということは内緒)

この後いくつかの問題はありました。

- ・ 施設課との厳しい対立
- ・ お金が足りない . . .

ですが、何とか解決をして開館・開店に

ベーカリーカフェですが、
パンは相当おいしいですよ！

月曜～土曜の

10：00～18：30

運営は業者に完全に任せています。

業者は公募しましたが（3社が応募）、
単なる商売ではなくて、
「大学と地域との交流を促進すること」
という条件を付けました。

結局は、K氏の会社が運営を請け負いました。
（正直なところ、生協じゃなくてよかった）

反対していた図書館職員も今では上得意です。

それから教員が外部の人と打ち合わせをする
ときにけっこう使っている。

学校訪問に来た高校生にもアピールしてます。

最初は、「学外者も入っていいの？」
とよく聞かれました。

でも今は、普通に使われています。

多いのは、

- 近所の子ども連れのお母さん
- 近所のやや年配の女性

明らかに、
キャンパスに入ることの
抵抗は少なくなっています。

企画運営を、業者に任せたことが、
一つのポイントだと思います。

- デザインセンスが全く異なる。
- 什器に関する発想が違う。
（ちなみにホワイトボードに●万円）
- 客を裏切ってはいけない（定期的な開店）
- 新メニューの定期的な開発
- 学生を使わない（←！）
- 安さで勝負をしない。

- ただやっぱり、これだけでは、地域との交流とは言えない。
- 大学の者と、地域の人とが同じ場所にいるだけではないか？
- もう少し、互いに交われないか？

ということで、こんな試みを。



- ひと月からふた月に1回ぐらい開催。
- 大学側の人間と、地域側の人間とのトークイベント
- 大学の教員が一方向的に語ることはしない。
（公開講座のようにはしない）
- 参加料を取る。
（一般1500円、学生500円ドリンク付き）
- 19時より21時まで

- でもまだまだ迷走中。
- 地域のニーズをうまくつかんでいないと思います。
- 地域の人たちは、どのようなことを、期待してるのか？
- あるいは何をしたいのか？

- もう一つの問題は、図書館内にあるということを活かしきれていないこと。
- もっと図書館の本を使って、何かをしたい。
(ただし、図書館員の説得は大変そうです)
- 最終的には、本とは何のためにあるのか、ということに行きつくのでは？
- そして図書館は何のためにあるのか？

- 紙の本は、デジタルコンテンツに比べると、基本的には多様性を保持しやすいものだと思います。

（デジタルコンテンツを否定しているわけではない）

- だから図書館は、本の多様性を意識的に維持する必要があると思います。
- ただ多様な本を使った交流をどのように構想するのかは、まだ思案中です。

本の保存と活用との
バランス？

いろいろ教えていただけると、
ありがとうございます。

ご清聴

ありがとうございました。